

令和 3 年度

人間生活学総合研究科教授内容

人間生活学専攻

東京家政大学大学院

(7)人間生活学専攻(博士後期課程)

区分	授業科目	単位数	心選別	担当教員		備考(シラバスページ)
心理臨床学分野	発達臨床心理学特論	2	選	講師(兼任)	平野真理	P1
	臨床心理学特論	2	選	教授	福井至	P2
	カウンセリング特論	2	選	客員教授	相馬誠一	P3
	心理療法特論	2	選	教授	三浦正江	P4
	統計解析特論	2	選	講師(兼任)	飯村周平	P5
人間発達学分野	発達教育心理学特論	2	選	教授	平山祐一郎	P7
	発達保健学特論	2	選	教授	宮島祐	P9
				兼任講師	及川郁子	P10
	発達栄養学特論	2	選	教授	太田一樹	P11
	人類遺伝学特論	2	選	教授	高野貴美	P12
	保育学特論	2	選	教授	戸田雅美	P13
	育児支援学特論	2	選	教授	榎沢良彦	P15
	臨床保育学特論	2	選	教授	岩崎美智子	P15
准教授				宮島祐	P17	
児童教育学特論	2	選	准教授	野口隆子	P17	
児童教育学特論	2	選	准教授	細井香	P18	
生活環境学分野	衣生活環境学特論	2	選	教授	半澤嘉博	P19
	衣生活文化特論	2	選	教授	潮田ひとみ	P19
	生命情報学特論	2	選	准教授	沢尾絵	P20
	住生活環境学特論	2	選	教授	藤森文啓	P21
	生物環境学特論	2	選	講師(兼任)	内田隆史	P21
	児童文化環境学特論	2	選	講師(兼任)	川上裕司	P22
				教授	森田幸雄	P24
児童環境学特論	2	選	講師(兼任)	是澤優子	P25	
児童環境学特論	2	選	教授	佐藤宗子	P27	
児童環境学特論	2	選	教授	大澤力	P29	
生活材料学分野	衣生活材料学特論	2	選	教授	濱田仁美	P30
	食品材料評価学特論	2	選	客員教授	峯木真知	P31
	食品材料利用学特論	2	選	准教授	小林理恵	P33
	機能性食品素材開発学特論	2	選	教授	佐藤吉朗	P34
	分子生物学特論	2	選	教授	池西淳之	P35
	生体材料学特論	2	選	教授	大田壽文	P37
	酵素学特論	2	選	教授	小西康子	P39
	食品材料工学特論	2	選	兼任講師	鍋谷浩志	P40
	食品材料プロセス特論	2	選	准教授	赤石記子	P41
	機能性食品学特論	2	選	兼任講師	重村泰毅	P42
生活管理学分野	被服管理学特論	2	選	客員教授	森俊夫	P43
	臨床栄養管理学特論	2	選	教授	澤田めぐみ	P44
	代謝栄養管理学特論	2	選	教授	尾形真規子	P45
	健康管理学特論	2	選	客員教授	岡純	P46
	食品管理学特論	2	選	客員教授	宮尾茂雄	P47
	生活情報処理特論	2	選	客員教授	松木孝幸	P48
	病態代謝管理学特論	2	選	講師(兼任)	勝川史憲	P49
	ロコモ・フレイル特論	2	選	教授	清水順市	P50
	リハビリテーション科学特論	2	選	教授	鈴木誠	P51
	研究指導	特別研究		必	教授	澤田めぐみ 藤森文啓 池西淳之 大田壽文 岩崎美智子 潮田ひとみ 榎沢良彦 大澤力 太田一樹 池西淳之 尾形真規子 小西康子 佐藤吉朗 清水順市 鈴木誠 高野貴美 戸田雅美 濱田仁美 半澤嘉博 平山祐一郎 福井至 三浦正江 宮島祐 赤石記子 小林理恵

※授業は、多様なメディアを利用し、同時双方向又はオンデマンドにより教室等以外の場所で行うことができる。

授業科目名： 発達臨床心理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名： 平野真理
授業の到達目標及びテーマ 人が社会の中で生きる上で抱える心理的な苦しさやつまずきについて、個人の「問題」として捉えるのではなく、他者との関係性の中で生じているものとして捉える視点を持ち、それらを調査研究あるいは実践を通して理解するための方法を実践的に身につけることができる。			
授業の概要 本授業では、人の発達プロセスにおいて、その時々に必要な関係性の獲得をサポートするための心理支援について、必要な知識と実践スキルを具体的に学ぶ。今年度は育児期女性に焦点をあて、育児期女性の抱える困難や、その背景にある社会的課題について、実際の調査データの統計的・質的分析を用いて読み取る。その上で、対象者らに必要な関係性を支える上で有効な心理支援の方法論について文献から検討し、実際の支援デザインを行う。これらの学びを通じて、発達の視点から人の心理支援を捉え、理解し、支援を考えることのできる専門性を培う。			
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：調査の背景知識を得る：育児期女性の置かれた社会的状況と支援の実際 第3回：調査デザインの確認：調査結果の概観と対象者特徴の読み取り 第4回：調査データの統計的分析1：デモグラフィック変数の分析 第5回：調査データの統計的分析2：心理変数の分析 第6回：調査データの質的分析1：テキストマイニング 第7回：調査データの質的分析2：カテゴリ分析 第8回：調査データの考察・論文化 第9回：心理支援のレビュー：育児期女性に対する心理支援 第10回：心理支援プログラムのデザイン1：プログラム概要のデザイン 第11回：心理支援プログラムのデザイン2：プログラム内容の検討 第12回：心理支援プログラムのデザイン3：倫理的配慮の検討 第13回：心理支援プログラムのデザイン4：プログラム教材の作成 第14回：まとめ			
授業外学修： 各回の内容に合わせて、各自が分担した分析等を行った上で授業に臨み、授業内ではディスカッションをメインに進める。			
テキスト：			
参考書・参考資料等：折に触れて紹介する			
学生に対する評価： 平常点 30%、課題 70%			
その他：			

授業科目名： 臨床心理学特論	単位数：2 単位	選択	担当教員名： 福井至
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 認知行動療法に関する未解決な問題を見出すことができる。 ・ 未解決な問題を解明できる研究計画を立てることができる。 ・ 研究結果を論文にし、ジャーナルに投稿できる。 			
<p>授業の概要</p> <p>認知行動療法に関するこれまでの研究をテーマごとに概観し、未解決な問題を見出し、その解決ができる研究計画を立て、研究を実施する。また、実験や調査が終了したら、論文を作成し、ジャーナルに投稿していく。本講義を通じて、研究成果を学会などで発表し、学術論文として公表できる研究能力をつけていくことができる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：うつ病への認知行動療法</p> <p>第3回：パーソナリティ障害への認知行動療法</p> <p>第4回：パニック性不安うつ病への認知行動療法</p> <p>第5回：恐怖症の治療</p> <p>第6回：肯定的気分の認知行動モデル</p> <p>第7回：教師のうつ予防法</p> <p>第8回：管理職のうつ予防法</p> <p>第9回：看護師のメンタルヘルス向上</p> <p>第10回：SEのうつ予防法</p> <p>第11回：研究計画の策定</p> <p>第12回：研究倫理委員会への申請書類の作成</p> <p>第13回：研究結果のデータ処理</p> <p>第14回：論文作成と投稿の手続き</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>毎回、受講生に発表をしていただくので、発表資料の作成に予習として100分以上が必要である。また、復習も100分程度は必要である。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>福井至 編著 認知行動療法ステップアップガイド 金剛出版</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>福井至・貝谷久宣監修 図解やさしくわかる認知行動療法 ナツメ社</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。授業への主体的参加の程度とレポート評価を50%ずつで加算評価する。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：カウンセリング特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：相馬誠一
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. カウンセリング理論の各理論について理解できる。 2. 医療・教育・福祉・地域・産業での応用について把握し、実践的技能を身につけることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>学部や修士課程で学んだカウンセリング理論と実践上の課題を深め発展させることを目的とする。再度、クライアント中心療法理論、精神分析理論、行動療法理論などの各カウンセリング理論と技法について理解する。その上でカウンセリングに関連する医療・教育・福祉・地域・産業などの分野についての応用について広く学習し、実践的技能が身につけるように学ぶ。その上で、豊かな専門的能力を修得していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス</p> <p>第2回：クライアント中心療法理論と展開</p> <p>第3回：精神分析理論と展開</p> <p>第4回：行動療法理論と展開</p> <p>第5回：その他のカウンセリング理論と展開</p> <p>第6回：医療におけるカウンセリングの実際</p> <p>第7回：教育におけるカウンセリングの実際</p> <p>第8回：福祉におけるカウンセリングの実際</p> <p>第9回：地域におけるカウンセリングの実際</p> <p>第10回：産業におけるカウンセリングの実際</p> <p>第11回：カウンセリングワークについて</p> <p>第12回：グループ・アプローチについて</p> <p>第13回：エンカウンター・グループについて</p> <p>第14回：ロールプレイについて・まとめ</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>予習・発表資料作成各100分。復習各100分。事前にテキストを読み発表資料を作成する。</p>			
<p>テキスト：必要に応じて、その都度配布と紹介。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>佐治守夫他著「カウンセリングを学ぶ 第2版」東京大学出版会</p> <p>平木典子他著「カウンセリングの理論」「カウンセリングの実習」北樹出版、その他適時配布</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。予習も含めて授業でのプレゼン30%、課題に対する受け答えなどの平常点40%、レポート提出30%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：心理療法特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：三浦正江
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>広く心理的ストレスに関連するテーマを一つ取り上げ、それに関する論文講読を行う。これによって、特定のテーマに関する研究動向を説明することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>テーマを一つ設定し、それに関する国内外の研究論文を収集して講読し、発表を行う。最終的にはレビュー論文としてまとめる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（授業の進め方、テーマに関する話し合い等）</p> <p>第2回：テーマに関する研究論文の検索</p> <p>第3回：テーマに関する研究論文の収集</p> <p>第4回：テーマに関する研究論文の講読・発表（1）：国内論文の半分程度の紹介</p> <p>第5回：テーマに関する研究論文の講読・発表（2）：国内論文の残りの半分程度の紹介</p> <p>第6回：テーマに関する研究論文の講読・発表（3）：海外論文の紹介</p> <p>第7回：テーマに関する研究論文の追加検索</p> <p>第8回：テーマに関する研究論文の追加収集</p> <p>第9回：追加収集した研究論文の講読・発表</p> <p>第10回：講読論文の概要をまとめる（1）：まとめ方の検討</p> <p>第11回：講読論文の概要をまとめる（2）：まとめたものの発表</p> <p>第12回：レビュー論文の執筆作業（1）：問題・目的と方法について</p> <p>第13回：レビュー論文の執筆作業（2）：結果について</p> <p>第14回：レビュー論文の執筆作業（3）：考察について</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>受講前：事前に取り上げたいテーマについて考えておく。また、心理学に関するレビュー論文を複数本講読しておく（テーマは何でもよい）。</p> <p>授業開始後：テーマに沿って、次回までの具体的な作業内容を指示するため、それを実施する（各3時間程度）。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業中に必要に応じて紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。発表30%、課題への取り組み態度30%、提出物（レビュー論文）40%によって評価する。</p>			
<p>その他：</p> <p>特になし</p>			

授業科目名： 統計解析特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：飯村周平
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>【知識】 各種の要約統計量、相関、回帰などの基本的な統計学的知識を理解することができる。</p> <p>【技能】 論文で報告される統計的数値を適切に解釈でき、かつ基本的な統計解析スキルを身に付けることができる。</p> <p>【態度】 心理学にかかわる現象に関して、統計学にもとづく態度をとることができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>心理学の理解に求められる基本的な統計的知識を復習したのち、多くの研究にとってよく用いられる手法を学ぶ。基本的に本授業は、HADやR等の統計解析ソフトを用いた実習形式で行い、知識と統計解析スキルの両方の取得を目指す。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（心理学における統計の役割）</p> <p>第2回：統計解析ソフトのインストールと環境設定（HAD・R）</p> <p>第3回：要約統計量の理解（平均値、標準偏差など）</p> <p>第4回：相関の理解（相関係数、検定など）</p> <p>第5回：t検定の理解（対応のあるt検定、対応のないt検定など）</p> <p>第6回：分散分析・多重比較の理解（1要因分散分析）</p> <p>第7回：分散分析・多重比較の理解（2要因分散分析）</p> <p>第8回：重回帰分析の理解（単回帰・重回帰・階層的重回帰）</p> <p>第9回：重回帰分析の理解（交互作用を含む重回帰と単純傾斜検定）</p> <p>第10回：媒介分析の理解（直接効果・間接効果など）</p> <p>第11回：探索的因子分析の理解（因子数の決定、回転法、因子負荷量の推定法など）</p> <p>第12回：確認的因子分析の理解（因子負荷量の推定法、モデル適合度の評価など）</p> <p>第13回：構造方程式モデルの理解（潜在変数、観測変数、モデル適合度など）</p> <p>第14回：構造方程式モデルの理解（潜在成長曲線モデル、交差遅延効果モデルなど）</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>授業の内容に応じて、次回までに論文の要約などのプレゼン準備を課す場合がある。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>小宮あすか・布井雅人「Excelで今すぐはじめる心理統計 簡単ツールHADで基本を身につける」講談社</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>南風原朝和「心理統計学の基礎—統合的理解のために」有斐閣アルマ</p> <p>大久保街亜・岡田謙介「伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力」勁草書房</p> <p>松村優哉・湯谷啓明・紀ノ定保礼・前田和寛「RユーザーのためのRStudio[実践]入門—tidyverseによるモダンな分析フローの世界—」技術評論社</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。毎回の授業への参加状況：50%、プレゼン、レポート、小テストの成績：50%の割合で評価する。</p>			

その他：

毎回の授業では、必ずノートPCを持参すること。

授業科目名：発達教育心理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：平山祐一郎
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>①記述統計、基礎的な推測統計について説明できる。②子どもの発達に関して、記述統計あるいは基礎的な推測統計から説明できる。③子どもの教育に関して、記述統計あるいは基礎的な推測統計から説明できる。以上の①～③をもとに、幅広い観点から子どもの発達や教育について論じることをテーマとする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間生活学専攻の学位授与の方針（2点）に基づき、「発達教育心理学特論」では、的確に子どもの発達を理解し、その上で、どのように適切な教育を行うかについて、心理学的に考える。具体的には、①データをもとに子どもの発達（成長や成熟等）を読み取り、②それを論理（理論）的に理解し、③様々な要素の因果関係を推測しながら、有効な教育（指導・支援）の在り方を検討する。心理学的な観点を中心とはするものの、身体発達との関連や社会状況の分析など、学際的な視点の広がりも持ちながら、講義をし、議論を行っていく。初回に詳細な説明を行う。なお、受講者数・受講者状況・受講者ニーズにより、概要と計画を変更することがある。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：「データをもとにした議論」に関する講義（基礎的内容）</p> <p>第3回：「データをもとにした議論」に関する講義（発展的内容）</p> <p>第4回：「心理学的観点」とは何か（基礎的講義）</p> <p>第5回：「発達心理学的観点」とは何か（基礎的講義）</p> <p>第6回：「教育心理学的観点」とは何か（基礎的講義）</p> <p>第7回：第1回から第6回までのまとめと解説</p> <p>第8回：子どもの発達と教育に関するデータ収集Ⅰ（乳幼児期編）※図書館にて</p> <p>第9回：第8回で得られたデータの分析と議論</p> <p>第10回：子どもの発達と教育に関するデータ収集Ⅱ（児童期編）※図書館にて</p> <p>第11回：第10回で得られたデータの分析と議論</p> <p>第12回：子どもの発達と教育に関するデータ収集Ⅲ（青年期編）※図書館にて</p> <p>第13回：第12回で得られたデータの分析と議論</p> <p>第14回：第8回から第13回までのまとめと解説</p>			
<p>授業外学修：各回の授業後に、①授業内容の要約、②次の授業までの課題、という2つの要素からなるミニレポートを課すので、毎回、提出すること。※週3時間半程度の授業外学修が求められる。</p>			
<p>テキスト：使用予定はないが、必要が生じた場合、授業の中で連絡する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業の中で適宜提示して行く。</p>			
<p>学生に対する評価：①発表及びその議論への参加の程度で50%、②レポート等課題で50%、とする。「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p>			

その他:受講者数や受講者の状況に応じて、本シラバスの内容は調整する。発表やレポート等、成績評価に関する事項は、授業内においてフィードバックを行う。

授業科目名：発達保健学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：宮島 祐
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生物としてのヒトを理解できる。子どもの発達という視点を持って社会における人としての存在について考察できる。人文系の受講者においては理系科学の視点を理解できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>慢性疾患や心身障害のある子どもたちの生物学的特性を中心に、その日常生活に関わる保健や年齢を重ねていくときに生ずる併発障害などについての文献講読を行う。さらに受講者によっては、その研究課題に即した文献についても、講読を行い、科学的な視点からの議論を展開する。子どもの発達と保健に関する問題についての考察が主たる課題であるが、議論を通して科学的な視点をもつことの重要性を強調する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：受講者の論文課題との関連を考慮した文献の選択。</p> <p>第2回：文献講読A、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第3回：文献講読A-1（文献Aの引用文献から）</p> <p>第4回：文献講読A-2（文献A-1の引用文献から）</p> <p>第5回：文献講読（英文）B、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第6回：文献講読（英文）B-1、（文献Bの引用文献から）</p> <p>第7回：2～6回の受講者の課題との関連につき討議。</p> <p>第8回：文献講読C、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第9回：文献講読C-1（文献Cの引用文献から）</p> <p>第10回：文献講読C-2（文献C-1の引用文献から）</p> <p>第11回：文献講読（英文）D、その文献を選択した理由。内容の紹介。</p> <p>第12回：文献講読（英文）D-1（文献Dの引用文献から）</p> <p>第13回：8～12回の受講者の課題をもとに博士論文の概要を発表。</p> <p>第14回：まとめ、総評、子どもの発達に関する概説・整理。</p>			
<p>授業外学習：</p> <p>博士論文テーマの選択理由と研究背景を5分間発表できるようまとめておくこと。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>なし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>特になし。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常点30%、文献の読解力30%、相互の議論20%、レポート20%。</p>			
<p>その他：授業の進め方を確認するため、第1回は必ず出席すること。</p>			

授業科目名： 発達保健学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：及川郁子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>学際的視点に立ち、特に医療的ケアを要する子どもやその家族のもつ発達、健康上の問題を解決するための支援方法や研究方法について文献検討し、議論することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>研究課題に関連する概念や理論、研究方法について文献講読を通して理解を深めるとともに、保健・医療の場における子どもたちを生活者として捉え、子どもたちと支援者を取り巻く現状分析を行い、自らの専門領域における研究課題の位置づけを明確にする。</p> <p>また、研究課題によっては予備的研究を通して研究枠組みや理論基盤を明確化していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： オリエンテーション：コースワークの説明</p> <p>第2回： 概念分析、文献のクリティークについて</p> <p>第3回： 文献検索1</p> <p>第4回： 文献検討1－1：概念分析</p> <p>第5回： 文献検討1－2：概念分析</p> <p>第6回： 文献検討1－3：概念分析に関する討議</p> <p>第7回： 文献検索2</p> <p>第8回： 文献検討2－1：研究方法論（量的研究）</p> <p>第9回： 文献検討2－2：研究方法論（質的研究）</p> <p>第10回： 文献検討2－3：研究方法に関する討議</p> <p>第11回： 研究課題と専門領域における現状分析</p> <p>第12回： 研究課題と専門領域における位置づけの検討</p> <p>第13回： 研究計画書の作成にむけて：理論的基盤と研究枠組みについて</p> <p>第14回： まとめ</p>			
<p>授業外学修：研究課題に関連する文献を専門領域のみならず関連領域を含めて検索し、資料としてまとめる。</p>			
<p>テキスト：特に指定なし</p>			
<p>参考書・参考資料等：適宜紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p>			
<p>その他：内容は履修生の状況により変更することがある。</p> <p>*本科目は通年で実施する予定（隔週開講）</p>			

授業科目名：発達栄養学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：太田一樹
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>人は一生を通じて身体的にも精神的にも変化をしていく。本授業では、各々のステージにおける生体機能の変化について学び、それぞれのステージに必要とされる栄養並びに栄養障害について理解することで、発達栄養学に関する深い学識を有することができることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>妊娠期から高齢期までのどの過程においても、栄養の過不足は人体に様々な影響を及ぼす。例えば母体の栄養状態は胎児に大きく影響する。また、高齢化社会に伴い、高齢期の栄養の過不足についても重要性が増している。本授業では、それぞれのステージにおける生体の機能と栄養の重要性について理解するとともに、栄養障害について論理的に考えていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：成長・発達・老化と栄養（総論）</p> <p>第2回：妊娠期の生理的特徴と栄養・栄養障害</p> <p>第3回：授乳期の生理的特徴と栄養・栄養障害</p> <p>第4回：新生児期・乳児期の生理的特徴</p> <p>第5回：新生児期・乳児期の栄養</p> <p>第6回：新生児期・乳児期の栄養障害</p> <p>第7回：成長期の生理的特徴</p> <p>第8回：成長期の栄養</p> <p>第9回：成長期の栄養障害</p> <p>第10回：成人期の生理的特徴</p> <p>第11回：成人期の栄養</p> <p>第12回：成人期の栄養障害</p> <p>第13回：高齢期の生理的特徴</p> <p>第14回：高齢期の栄養と栄養障害</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>授業前に文献を読み、要旨を作成してくること（100分）</p>			
<p>テキスト：</p> <p>なし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>テーマに応じて、文献や参考書を紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常点10%、レポート30%、試験60%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 人類遺伝学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：高野貴子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>(1) 人を対象とした遺伝学の基礎知識を得て、その概略を説明できる。</p> <p>(2) 遺伝性疾患をもつ子どもについての理解を深め、その特徴を説明できる。</p> <p>(3) 遺伝性疾患をもつ子どもたちと家族への支援方法を考え、実践することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>子どもの発達の過程を遺伝学的観点から捉えることを教示する。受精から胎児期、出生、乳幼児期から思春期にいたる成長と発達に、遺伝や環境が及ぼす影響を学ぶ。遺伝的要因と、それによる疾病について学び、自ら調べる方法を学習する。具体的な事例を通して現代的な問題点を考える素地を培う。学んだ事柄をわかりやすく発表し、相互討論し、学習を深める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： イントロダクション、遺伝・人類遺伝学・臨床遺伝学とは</p> <p>第2回：家系図、ゲノム、遺伝子</p> <p>第3回：染色体、男の子と女の子が生まれるしくみ、染色体分析の実際</p> <p>第4回：染色体異常</p> <p>第5回：染色体異常症や先天異常を持つ子ども</p> <p>第6回：遺伝カウンセリングの実例</p> <p>第7回：出生前診断とその問題点</p> <p>第8回：単一遺伝子疾患（メンデル遺伝病）</p> <p>第9回：多因子遺伝とその疾患</p> <p>第10回：エピジェネティクス、インプリンティング疾患</p> <p>第11回：体細胞遺伝学、がん</p> <p>第12回：遺伝医学と生命倫理</p> <p>第13回：プレゼンテーションの準備</p> <p>第14回：プレゼンテーションとまとめ</p>			
<p>授業外学修：(予習100分) テキストの関連項目を読んでおく。</p> <p>(復習100分) ノートの整理と課題の学習</p>			
<p>テキスト：こちらで準備するので購入する必要はない。</p> <p>「改訂第5版 遺伝医学への招待」南江堂、「新版 絵でわかるゲノム・遺伝子DNA」講談社、</p> <p>「環境とエピゲノム」丸善出版</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業内で紹介する。</p> <p>「わかりやすい臨床遺伝学」医歯薬出版（図書館に配架してある。）</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。予習・復習のノート(20%)、授業内討論と発表(60%)、レポート(20%)</p>			
<p>その他：学生の理解度と興味に合わせて授業を展開する。</p> <p>例えば「双子の遺伝」を取り入れるなど</p>			

授業科目名：保育学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：(オムニバス) 榎沢良彦・戸田雅美
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院後期博士課程人間生活学総合研究科人間生活学専攻における保育学領域についての高度な専門知識を修得するためのコースワークの授業として及び高い研究能力を身に付けるためのリサーチワークとして保育学特論を講じる。到達目標は以下の事項である。</p> <p>①子どもと保育者の根本的関係を論理的に説明できる。 ②保育者の子ども理解の妥当性を論理的に説明できる。 ③保育実践を規定する条件を論理的に説明できる。 ④保育を取り巻く状況を分析しその課題を明確にできる。 ⑤保育実践を論理的に深く考察できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>保育の現場において高度な専門的職業人としてないし新たな課題について高度な研究を行うためには保育の根源について理解し、保育実践を考察する力を身に付ける必要がある。そこで、この授業においては「保育」とは何かを理解し、その上で、現在の保育実践の在り方と課題を検討することを通して、新たな課題を解決できる優れた研究能力と専門職業人としての高い実践力を修得する。(オムニバス方式／全14回)</p> <p>(榎沢良彦／7回)「保育とは何か」という最も根本的な問いに迫る議論について理解を深める。 (戸田雅美／7回)現在の保育の具体的な在り方について、具体的な保育の実践事例を検討することを通して学ぶ。また、現在の保育現場が抱えている課題等についても検討していく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション・子どもと保育者の相互性（榎沢） 第2回：保育実践における理解（1）：保育者の子ども理解の構造（榎沢） 第3回：保育実践における理解（2）：実践的理解の基盤と基礎付け（榎沢） 第4回：子どもと保育者の関わりの基盤（榎沢） 第5回：保育者への生成（榎沢） 第6回：保育者の自明性（榎沢） 第7回：子どもと保育者の共生・まとめ（榎沢） 第8回：保育実践の具体的なあり方：遊び（戸田） 第9回：遊びとは何か～遊び論と保育における遊び（戸田） 第10回：保育実践の具体的なあり方：生活（戸田） 第11回：保育実践の具体的なあり方：環境を通しての保育（戸田） 第12回：保育実践の具体的なあり方：子どもへの援助の実際（戸田） 第13回：保育実践の具体的なあり方：子どもの育ちをどうとらえるか（戸田） 第14回：保育を取り巻く現代的課題への対応の実際・まとめ（戸田）</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>各回のテーマに関して文献を調べ検討したい問題を考える。(予習・100分) 授業内容を整理し、そこから派生する問題について考察する。(復習・100分)</p>			

テキスト：なし

参考書・参考資料等：

- ・榎沢良彦『幼児教育と対話—子どもとともに生きる遊びの世界』岩波書店
- ・その他、随時、資料を配付する。

学生に対する評価：

「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。各回の課題とそれに基づく議論への参加：40% 2回の課題レポート（講評する）：60%

その他：

授業科目名：育児支援学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：岩崎美智子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業では、現代社会における育児支援の必要性と意義について根本から問い直しながら、保育者の専門的知識・技術・倫理や問題解決力について多角的に考察する。</p> <p>到達目標は、以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代社会における育児支援の意義と役割・機能を理解し、保育者が持つべき専門的な知識や実践力について多角的に検討することができる。 ・支援者として解決すべき課題を探求できるような保育者の専門性について、議論しながら考察を深めることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>現代社会の特質をとらえ、子育てと支援について検討しながら、支援者としての保育者の役割と意義を考察する。新たな議題を探求できる優れた学識と研究能力を習得する。</p> <p>保育所における親子支援や児童養護施設における家族支援を具体的な実践事例を通じて理解し、討議を重ねながらその内容と方法を検討する。また、家族が直面している問題の検討と、援助者として保育者が感じる困難や感情労働を育児支援の観点から考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：子育てとはどういうことか</p> <p>第2回：「ケアすること」についての検討</p> <p>第3回：「ケア」と「支援」</p> <p>第4回：現代家族が直面する諸問題</p> <p>第5回：保育所における親子支援</p> <p>第6回：児童養護施設における家族支援</p> <p>第7回：親子支援の実際—シングルペアレントファミリーへの支援</p> <p>第8回：親子支援の実際—外国につながる子どもと家族への支援</p> <p>第9回：「難しい親たち」への支援</p> <p>第10回：援助すること—相互行為と関係性</p> <p>第11回：援助することの難しさ—感情労働の視点から</p> <p>第12回：支える人を支えるには</p> <p>第13回：院生による研究発表（1）</p> <p>第14回：院生による研究発表（2）</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>予習1時間、復習1時間</p> <p>予習として、各自が問題意識をもち「育児支援」に関連のある文献を読んで考察を深めておくこと（100分）。復習として、授業での議論をノートに整理する（100分）。</p>			
<p>テキスト：特に指定しない。随時資料等を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：特に指定しないが、随時参考文献等を紹介する。</p>			

学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。参加態度・授業内発表等30%、予習・復習30%、課題・レポート40%。予習・課題に対しては、授業中に講評する。

その他：

授業科目名：臨床保育学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：(オムニバス) 宮島 祐・野口隆子・ 細井 香
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院博士後期課程、人間生活学専攻として、履修院生の専門領域のみではなく、総合的学際的視野にたつ人材の養成に寄与すべく、臨床保育学という、従来の保育・教育領域を基盤とし、保育現場で体験する可能性のある様々な個別の問題にも対応できるという、より臨場的な視点を持った学問領域の構築にも関われる能力、学識を得る。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>3名の教員によるオムニバス形式である。一人ひとりの子どもに向き合う保育・教育を臨床保育と捉え、その考え方を築いていくための基礎的な知識を涵養するため、各教員の専門領域から、最新のトピックスを交えて講義を行うとともに、履修院生の経験、考え方も発表する形で双方向的な授業を行う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション（宮島、細井、野口）</p> <p>第2回：エビデンスに基づく保育① 子どもの成長と習慣（細井）</p> <p>第3回：エビデンスに基づく保育② 保育環境（細井）</p> <p>第4回：エビデンスに基づく保育③ 虐待予防（細井）</p> <p>第5回：エビデンスに基づく保育④ 子どものヘルスプロモーション（細井）</p> <p>第6回：子どもの発達と社会の変化 発達の諸側面と縦断研究（野口）</p> <p>第7回：認知能力と非認知能力の発達（野口）</p> <p>第8回：発達と教育 幼児期から児童期の教育と保育の質をめぐる動向（野口）</p> <p>第9回：保育支援の方法と実態（野口）</p> <p>第10回：定型発達児の乳幼児期の里程碑について（宮島）</p> <p>第11回：神経発達症群（発達障害）に至る歴史的変遷を知る（宮島）</p> <p>第12回：神経発達症群（発達障害）の乳幼児期の行動特性（宮島）</p> <p>第13回：神経発達症群（発達障害）の家族支援を含む環境調整・連携（宮島）</p> <p>第14回：まとめ（宮島、細井、野口）</p>			
<p>授業外学修：予習100分、復習100分を行う。</p>			
<p>テキスト：特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等：各教員より指示</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。予習・復習の有無20点。諮問に対する受け答えなどの平常点40点。課題に対するレポート提出40点</p>			
<p>その他：3人のオムニバスであり授業の進め方を含め説明があるので、第1回のオリエンテーションには必ず出席すること。</p>			

授業科目名：児童教育学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：半澤嘉博
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○小学校教育における歴史的変遷と課題を的確にとらえることができる。 ○小学校教育のあるべき姿を多面的にとらえ、提案することができる。 ○小学校児童の発達段階をふまえ、多面的に理解することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>(概要) 時代の流れの中で、児童の教育はどのように変遷したかを振り返るとともにあるべき児童教育の姿を多面的な視点から考察する。(オムニバス方式/全14回)</p> <p>(家田晴行/1～7回) 小学校教育においてどのような改革がなされようとしているのか、実際の小学校現場を観察、分析することにより、小学校教育の望ましい姿を考察する。</p> <p>(半澤嘉博/8～14回) 児童理解、児童の発達にもとづいた指導方法を特別支援の視点も取り入れながら考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：歴史的変遷をふまえた現在の小学校教育について考察する。</p> <p>第2回：個性重視の教育のための課題と方策を考察する。</p> <p>第3回：授業改善のための課題と方法を考察する。</p> <p>第4回：基礎・基本の徹底を図るための授業のあり方を考察する。</p> <p>第5回：小学校現場における授業研究の実際について考察する。</p> <p>第6回：授業研究における観察・分析の視点と方法について考察する。</p> <p>第7回：授業研究(VTR)における事例を児童の活動を中心に分析し考察する。</p> <p>第8回：授業研究(VTR)における教師の発問を中心に考案する。</p> <p>第9回：授業研究(VTR)におけるICT活用を中心に考案する。</p> <p>第10回：授業の進め方や教材の分析の仕方を通して新しい授業のあり方を考察する。</p> <p>第11回：発達障害の特徴に応じた授業のあり方を考察する。</p> <p>第12回：一斉指導におけるユニバーサルデザインと合理的配慮の仕方を考察する。</p> <p>第13回：諸外国における特別支援教育の方策を調べ、最新の指導法について考察する。</p> <p>第14回：通常の学級での個別支援や特別支援教育支援員等との連携による授業展開のあり方を考察する。また、リソースルーム(特別支援教室)等を活用した個別支援のあり方を考察する。</p>			
<p>授業外学修：<事前学修>VTRの視聴等をあらかじめ行い、自身の観点による分析を行っておく。(そのレポートをもとに討論を行う。)(100分)</p> <p><事後学修>受講者で話し合った指導内容等を受け、各自の授業改善に関するポートフォリオをまとめていく。(100分)</p>			
<p>テキスト：特になし。必要に応じて資料等を配布する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：VTRやプリント等は必要に応じて用意する。</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。課題についてのレポート、発表、討議などで総合的に行う。</p>			
<p>その他：特になし</p>			

授業科目名：衣生活環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：潮田ひとみ
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>健康、安全、快適な衣生活をめざし、生活の質を向上させるような、衣生活環境に関する最新の知見について理解できるようになる。また、これらを解明するために必要な衣服素材の熱・水分移動特性、力学特性といった基礎的理論について理解できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>衣服着用時の快適感を構成する要因を人間－衣服－環境系にとらえ、人間と衣服、衣服と環境、人間と環境といった視点から分析する。快適な衣生活を送るための要因、安全な衣生活を送るための要因、健康な衣生活を送るための要因について、新着文献等を参考にしながら概説し、衣生活の向上について考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：衣服の着用快適感を構成する要因（1）衣服素材の力学的特性</p> <p>第3回：衣服の着用快適感を構成する要因（2）衣服素材の熱移動特性</p> <p>第4回：衣服の着用快適感を構成する要因（3）衣服素材の水分移動特性</p> <p>第5回：衣服の着用快適感を構成する要因（4）衣服圧の測定方法</p> <p>第6回：衣服の着用快適感を構成する要因（5）衣服圧の評価方法とデザインへの適用</p> <p>第7回：衣服の着用快適感を構成する要因（6）衣服の肌触りの測定方法</p> <p>第8回：衣服の着用快適感を構成する要因（7）衣服の肌触りの評価方法</p> <p>第9回：衣服の着用快適感を構成する要因（8）着用快適感の測定方法と評価方法</p> <p>第10回：衣環境の評価（1）ヒトの感覚による官能検査法</p> <p>第11回：衣環境の評価（2）モデルによる評価法</p> <p>第12回：衣環境の評価（3）数値シミュレーションによる評価法</p> <p>第13回：衣環境の評価（4）衣環境と健康・安全</p> <p>第14回：総括</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>事前学習：授業終了時に次回授業への準備テーマを指示する。（調査時間 2時間）</p> <p>事後学習：次回の授業までに関連文献を調査し、レポートにまとめる。（レポート作成時間 3時間）</p>			
<p>テキスト：</p> <p>教員が英語文献を準備する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業の該当回で、必要に応じて呈示する。</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。授業中の討論への参加状況（50%）・レポート（50%）。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：衣生活文化特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：沢尾 絵
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>服飾・染織品に関する歴史的資料について、解説・分析を行い、服飾史の立場から考察できる。また、この方法論を、自身の新たなテーマに応用できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>歴史上に確かに存在した服飾やこれを形作る染織品は、人が自らの手によって作り出したものであり、その時代の社会状況や生活者の立場・嗜好を顕著に表している。実在した服飾・染織品、人々の衣生活、これを取り巻く社会状況等を広く文化史的に捉える研究を実践するために、本講義では江戸時代前期の染織品をテーマとし、さまざまな視点から考察し、論じていく。まずは既存の研究による通説を、資料と共に正しく理解し、検証する。その上で、新たな研究の核となり得る資料を提示し、内容の解説・分析から資料の評価、同時代の資料の再検討の方法、その意義、歴史的視点を踏まえた文化史的なアプローチの方法論について述べる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：近世の服飾・染織史研究① 小袖服飾の変遷</p> <p>第2回：近世の服飾・染織史研究② 小袖服飾の文様と染織技法</p> <p>第3回：江戸時代前期の服飾研究の特色と課題</p> <p>第4回：越後屋呉服店の社会的役割と服飾研究の位置づけ</p> <p>第5回：呉服史料研究①『染代覚帳』・『宗感覺帳』書誌学的研究</p> <p>第6回：呉服史料研究②『染代覚帳』染色名称の検討</p> <p>第7回：呉服史料研究③『染代覚帳』分析</p> <p>第8回：呉服史料研究④『宗感覺帳』染織名称の検討</p> <p>第9回：呉服史料研究⑤『宗感覺帳』分析</p> <p>第10回：服飾資料による検討①小袖雛形本と風俗画</p> <p>第11回：服飾資料による検討②風俗画と西鶴作品</p> <p>第12回：服飾資料による検討③染色技法書、商品学書他</p> <p>第13回：江戸時代の商品価格と人々の経済観念 検討のための方法論</p> <p>第14回：呉服史料研究総括</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>テーマに沿って配布する資料を事前に読んでおく（予習100分）。（復習レポート100分）</p>			
<p>テキスト：特になし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>必要に応じて紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常授業への取り組み（60%）準備・レポート（40%）</p>			
<p>その他：毎回学ぶ内容を、自身のテーマに置き換えて捉えなおす作業を怠らないこと。</p>			

授業科目名：生命情報学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：(オムニバス) 藤森文啓・内田隆史
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生命活動は食糧・人口問題、環境問題、経済等と密接な関係がある。そこで本特論では各論としての人口問題、環境問題、エネルギー問題の理解に加え、遺伝子情報などを加味したヒト生命の総合考察を情報学的手法で行う。各種データベースの有機的な関連性について学ぶことで、新たな知見を得るための目を養うことができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>各種データベースの閲覧、データ取得、解析、理解を深め、特にヒト塩基配列決定法としての基本であるサンガー法に加え、次世代型シーケンサーが採用しているハイブリダイゼーション法を活用したアレイ法やナノポア技術などを理解したうえで、生物ゲノムから見えてくる事象について考察する。ゲノム解析から得られるデータの意義や活用方法について、特に生命活動に関係する食糧問題・人口問題・環境問題を絡めながら、その関係性などの解析をどのように進めるかについても学ぶ。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：人口統計データ</p> <p>第2回：食糧需給に関するデータベース</p> <p>第3回：エネルギー問題</p> <p>第4回：ヒト遺伝子情報とは</p> <p>第5回：遺伝子情報データベース</p> <p>第6回：生化学情報データベース</p> <p>第7回：遺伝子解析法</p> <p>第8回：生化学解析法</p> <p>第9回：組換え食品・動物とは</p> <p>第10回：統計解析法</p> <p>第11回：生命情報データベース</p> <p>第12回：ゲノム情報</p> <p>第13回：トランスクリプトームデータベース</p> <p>第14回：総合討論</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>大学基礎生物、生化学の理解が必要であるので、予習100分。復習100分。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>関連文献、資料等の配布により授業構成する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：授業開始前に指定</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>講義のレポート、出席による総合評価で、80点以上を優、70点から79点を良、60点から69点を可とし、59点以下を不可とする。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：住生活環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：川上裕司
<p>授業の到達目標及びテーマ：</p> <p>一般住宅と生活する上で利用する病院，図書館，美術館，などの身近な公共施設を含めた「生活に関わる室内環境」を対象として家政学，環境衛生学，住居医学を踏まえて「室内環境学」の基礎から現状と対策までをテーマとする。人間生活学専攻の博士課程大学院生として，「快適な住生活環境とは何か？」について「博士論文」のテーマを踏まえた議論ができるようになること，また，研究課題の適切な研究手法を立案できることを到達目標とする。</p>			
<p>授業の概要 家政学と関連が深い住環境の現状（問題点）と快適な住環境や住まい方（対策）をバックグラウンドとして，室内環境学（衛生学）を中心テーマとした講義，討論，小論文の作成を毎回行う。博士課程の大学院生向けの講義であるため，博士となるために必要な理科系的思考を養うために適切な最新論文の輪読も授業に盛り込む。また，小論文は，20分以内で論点をまとめることによって，博士論文制作のために不可欠な「論文執筆力を養うこと」を目的として指導する。</p>			
<p>授業計画：</p> <p>第1回： 家政学からみた住生活環境＜概論：現代社会の衣・食・住の変遷＞</p> <p>第2回： 化学物質と住生活環境＜揮発性有機化合物，VOC，シックハウス症候群＞</p> <p>第3回： 物理的要素と住生活環境＜音，光，温熱，臭いがもたらす快適感と不快感＞</p> <p>第4回： 環境衛生学と住生活環境（1）＜細菌による感染症の問題点＞</p> <p>第5回： 環境衛生学と住生活環境（2）＜真菌（カビ）とアレルギー疾患の問題点＞</p> <p>第6回： 環境衛生学と住生活環境（3）＜新型コロナウイルス感染症対策の問題点＞</p> <p>第7回： 有害動物と住生活環境＜ダニと昆虫によるアレルギー・感染症問題＞</p> <p>第8回： 愛玩動物と住生活環境＜愛玩動物飼育のメリットとデメリット＞</p> <p>第9回： ユニバーサルデザインと住生活環境＜障害者・子供・高齢者が快適な環境づくり＞</p> <p>第10回： 住生活環境の未来＜超高齢化社会とどう向き合い新たな住環境を構築するのか＞</p> <p>第11回： 関連論文 輪読（1）～都市環境と住生活環境を考える～</p> <p>第12回： 関連論文 輪読（2）～地球環境と住生活環境を考える～</p> <p>第13回： 関連論文 輪読（3）～環境教育と住生活環境を考える～</p> <p>第14回： 総合討論～生活者にとって快適な住環境とは何かを考える～</p>			
<p>授業外学修：希望する大学院生には，以下のいずれかの施設を一緒に見学して解説および討論の学外研修を行う。①国立ハンセン病資料館（東村山市青葉町）、②国立科学博物館（台東区上野公園）、③嘉永4年創業・松岡醸造(株)（埼玉県比企郡小川町）、④ガスの科学館（江東区豊洲）</p>			
<p>テキスト：</p> <p>①室内環境学概論，室内環境学会編（編集委員長・川上裕司），東京電機大学出版局（2010年刊），</p> <p>②室内環境における微生物対策，室内環境学会微生物分科会編（編集委員・川上裕司），技報堂出版（2016年刊）</p>			
<p>参考書・参考資料等：①住居医学（V），筏義人・吉田修 編著，米田出版（2011年刊），</p> <p>②微生物学・地球と健康を守る，坂本順司 著，裳華房（2017年第2版）</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常点</p>			

30%, 小論文30%, 最終レポート40%。小論文に対するフィードバックを行う。

その他：学会誌への投稿論文の書き方（和文・英文）についても、適宜指導する。

授業科目名：生物環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：森田幸雄
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>各自の専門分野の環境微生物学に関連する研究について、博士として一人で企画できる考え方や研究を遂行できる手法・知識を習得する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>バイオハザードとバイオセーフティーについての考え方を基礎としながら、生物（細菌・ウイルスも含む）の生態、有用性、健康危害について理解を深める。その後、関連法令（「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」、「食品衛生法」等）に記載されている病原体のリスクおよび環境（室内環境も含む）や食品に起因する病原体（感染症、動物由来感染症、室内環境からの病原体）について微生物学的な特徴や本病原体による食中毒や感染症発生時の疫学的解析方法について習得する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：授業内容説明、環境微生物とは</p> <p>第2回：バイオハザードの概念</p> <p>第3回：環境に存在する生物</p> <p>第4回：自然環境・大気・水環境と生物（微生物も含む）との関連</p> <p>第5回：室内環境と生物（微生物も含む）との関連</p> <p>第6回：食べものと生物（微生物も含む）との関連、感染型食中毒細菌・ウイルス</p> <p>第7回：食べものと生物（微生物も含む）との関連、毒素型食中毒細菌</p> <p>第8回：微生物の検出や同定方法</p> <p>第9回：微生物の検出や同定等のための遺伝子学的技術について</p> <p>第10回：微生物の同定や解析等のための遺伝子学的分析法について</p> <p>第11回：自然環境・水環境に存在する病原微生物（主に環境に存在する病原細菌・ウイルス）</p> <p>第12回：環境に存在する病原微生物（主に動物由来感染症起因病原体）</p> <p>第13回：環境に存在する病原微生物（主に人固有の感染症起因病原体）</p> <p>第14回：生物環境学まとめと解説</p>			
<p>授業外学修：次回に実施する内容に関する文献等(英文を含む)を手渡すので、全文を読み理解しておくこと（予習100分、復習100分）</p>			
<p>テキスト：関連論文、総説等を利用</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>室内環境学概論(東京電機大学出版社)、関連論文、総説等を利用。購入する必要はありません。貸し出します。</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>平常点(40%)，毎回実施レポート(30%)，試験(30%)により評価。</p>			
<p>その他：授業内容については、学生の専門分野を考慮して若干の変更をします。また、レポートは確認後、指摘事項を記し、返却します。質問についての回答は随時行います。</p>			

授業科目名：児童文化環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：是澤優子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本特論は、人間生活学専攻生活環境学分野における高度な専門知識習得のため、〈近代日本における「子どものための文化」の萌芽と展開〉をテーマに据え、以下の4点を到達目標とする。</p> <p>①近代的児童観の成立過程に基づいて、明治期における「子どものための文化」創出の背景と経緯を説明できる。</p> <p>②明治期から大正期における児童研究と児童文化研究の関連性を説明できる。</p> <p>③各自が担当する文献や論文購読において、適切な報告書を準備し、分かりやすく発表できる。</p> <p>④討論において積極的かつ建設的に参加できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童文化は、子どもの成長発達に深く関わる文化であり、「子どもが作り出す文化」と「大人が子どものためにつくり出す文化」という視座を合わせ持つ概念である。本特論では、日本近代における児童文化史の分析を通して、人間生活学専攻の学位授与方針に基づく総合的・学際的視野に立つ人材育成に、児童文化環境学の側面から貢献する。</p> <p>具体的には、明治後期から昭和初期にかけて展開した児童用品研究、児童博覧会といった社会的活動を基軸に据える。明治期に出版された雑誌や文献、関係資料を読み込みながら、子どものための文化環境を大人が意識して作り出す営みが産学協同の形をとりながら社会的規模で始まった背景と要因、展開歴史的意義を考察する。授業は、講義ならびに受講生による報告と討論を組み合わせる。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： 授業ガイダンスー講義の目的と授業方針の解説</p> <p>第2回： 受講生の問題意識説明</p> <p>第3回： 文献紹介と割当</p> <p>第4回： 雑誌『児童研究』の講読（1）児童学の視点</p> <p>第5回： 雑誌『児童研究』に関する報告と検討（1）児童学の視点から</p> <p>第6回： 雑誌『児童研究』の講読（2）児童文化の視点</p> <p>第7回： 雑誌『児童研究』に関する報告と検討（2）児童文化の視点から</p> <p>第8回： 報告および討論：近代日本における児童研究の意義</p> <p>第9回： 日本における児童博覧会（1）明治・大正期の児童博覧会</p> <p>第10回： 日本における児童博覧会（2）子どもへの注目とこども博覧会</p> <p>第11回： 日本における児童博覧会（3）近代的百貨店と児童博覧会</p> <p>第12回： 子ども用品の改良と創造に尽力した先達たち</p> <p>第13回： 報告および討論：近代日本における「子どものための文化」創出の諸要因</p> <p>第14回： 講義のまとめー子ども像の変容と文化環境の創出</p>			
<p>授業外学修：授業前はテーマに関連する文献・論文などを読み、要点と自分の意見をまとめた「報告書(予習)」を作成する（予習100分）。授業後は、授業内容をふりかえり、論点と課題を整理した「報告書(復習)」を作成する（復習100分）。</p>			

テキスト：

なし。児童文化領域における受講生の学習状況に合わせて、適宜プリントを配布する。

参考書・参考資料等：

是澤博昭・日高慎吾『子どもたちの文化史』（臨川書店、2019）、神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代』（世界思想社、2011）、本田和子『子ども100年のエポック』（フレーベル館、2000）、山口昌男『敗者の精神史』（岩波書店、1995）。その他は、進捗状況を見ながら適宜紹介する。

学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。

①平常点70%（報告書30%、発表20%、授業内容・発表に対するコメントや討論への参加20%）、②期末レポート30%により、総合的に判断し成績を評価する。また、報告書およびレポートに対して、到達目標に照らし合わせながらフィードバックを行う。

その他：

授業科目名：児童文化環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：佐藤宗子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>児童を取り巻く文化環境の中における「児童文学」ジャンルについて、歴史的な成立の過程や現在の状況などを評価することができる。具体的な作品に接して、その表現内容を感じ取ることができる。自身の問題意識に基づいて、意見交換に参加することができる。</p> <p>テーマ＝児童文学とは何か——成立・展開および現状を考える——</p>			
<p>授業の概要</p> <p>児童を取り巻く環境の一要因としての「文学」を考察する。「児童文学」という分野の成立と展開を、近代の歴史的状況から出発し、現代の多様化に至るまでを、「子ども」観の問題などからめつつ、概観する。また、具体的に、批評的文章にふれるとともに、短編や長編の作品に接することで、現在におけるこの分野の可能性や課題を追究する。これにより、学位授与方針で示されるような、広く社会・文化状況の中における「文学」の領域についての学識と理解を有し、総合的・学際的視野に立つ人材養成をはかるものとする。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：はじめに——「児童文学」とは何かを考えるために——</p> <p>第2回：「児童文学」の歴史（1）——海外における誕生——</p> <p>第3回：「児童文学」の歴史（2）——海外における展開——</p> <p>第4回：「児童文学」の歴史（3）——日本の場合——</p> <p>第5回：近代的「子ども」観と「童話」伝統批判</p> <p>第6回：「現代児童文学」の出発——『子どもと文学』を読む——</p> <p>第7回：小川未明作品の再検討</p> <p>第8回：千葉省三作品の再検討</p> <p>第9回：「現代児童文学」の展開</p> <p>第10回：「現代児童文学」の転換</p> <p>第11回：現代の短編を読む</p> <p>第12回：現代の長編を読む（1）——日常的な作品——</p> <p>第13回：現代の長編を読む（2）——非日常的な作品——</p> <p>第14回：児童文学の展望</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>指定したテキストについては、集中講義の授業開始前にざっと目を通してきてもらえらることを望む。およそ2～3時間を見込む。また、期間中の配付資料については、読み直してもらえらるとよい。およそ、1日当たり40分程度。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>プリントを配布する。</p> <p>また2冊程度、授業開始時に入手可能な作品を、確認し、集中講義の少し前に指定する予定。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業時に、受講者の状況に応じて随時、指示する。</p>			

学生に対する評価：

「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。

授業への出席及び発言等の参加状況を70%、ミニレポートを30%として合算し、評価をする。なお、とりあげた児童文学の作品・批評について評価することができたか、その表現内容を感じることができたか、自身の問題意識に基づいて意見交換できたかを評価の観点とする。

その他：

指定テキストについては、集中講義開始の一か月半程度前に、メールで直接受講者に連絡できるようにする予定。このため、事務室を通じて、受講者から担当者あてにメールを先に送ってもらうことになるだろう。

授業科目名： 児童環境学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：大澤 力
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>本専攻における専門的知識習得のためのコースワーク授業および研究の一環として児童期全般における自然環境・社会環境との関係性を理論と実践から学び、地域社会・日本・世界へと視野を展開し、児童期における環境学の重要性および可能性を把握できると共に持続可能性のある明日に向けた新たな課題を探究できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>子どもや児童を対象とした環境教育の重要性と可能性を理論的理解および実践的理解を融合した形で学び、実践事例や体験的演習を経て、身近な環境から地球規模までの時代的課題の克服法を検討しつつ、その具体的な手立てを考察し、各自における今後の研究と学修に資する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：はじめに 児童学・子ども学とは？</p> <p>第2回：子ども学の基礎＜子どもに生きる・子どもと創る！＞</p> <p>第3回：特色ある子ども学の教育・保育① 表現・子ども芸術</p> <p>第4回：特色ある子ども学の教育・保育② 環境・持続可能な社会づくりのための教育</p> <p>第5回：特色ある子ども学の教育・保育③ 健康・健康保育</p> <p>第6回：特別支援教育</p> <p>第7回：保育の学びと実践の場としての教育・保育実習 ー理論と実践の融合を図るー</p> <p>第8回：持続可能な未来に向けて 子どもたちと一緒に自然と仲良くなりましょう！</p> <p>第9回：未来を創造する自然の中での子育て</p> <p>第10回：科学性の芽生えを促進する幼児期自然教育におけるビオトープの実践的研究</p> <p>第11回：幼児期の自然教育・環境教育から持続可能な開発のための教育へ</p> <p>第12回：さあ、心を育てる環境養育を始めましょう！</p> <p>第13回：児童環境学特論から子ども環境学特論へ</p> <p>第14回：授業全体のまとめ</p>			
<p>授業外学修：予習1時間、復習・ノート整理1時間 高校国語・社会・生物の学修</p>			
<p>テキスト：「幼児の環境教育論」大澤力著（文化書房博文社）</p> <p>「子ども学総論 ー子どもに生きる・子どもと創る！ー」岩田力・大澤力編著（日本小児医事出版社）</p>			
<p>参考書・参考資料等：「科学性の芽生えから問題解決能力育成へー新学習指導要領における資質・能力の視点からー」小林辰至・大澤力編著（文化書房博文社）、「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソン著（新潮社）、「自分と子どもを放射能から守るには（日本語版特別編集）」ウラジミール・バベンコ著・辰巳雅子訳（世界文化社）</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常点20%、小課題30%、レポート50%にて評価する。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：衣生活材料学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：濱田仁美
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>高分子化学及び熱力学の基礎を修得し、衣服材料の特性をより物理化学的視点から考察して、課題を探究できる能力を養う。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>衣服材料の大半は繊維製品からなり、原材料の繊維の性質は最終製品である衣服材料の性能に密接に関連している。繊維は高分子であり、高分子の構造や性質、合成法、反応機構を理解することは、繊維特性のより深い理解につながり、自身の研究の考察を行う上でも重要な知識となる。</p> <p>これらの学習を通して、衣服材料の特性についてより包括的な考察を行い、課題を探究できるようになることは、学位を取得する上で重要である。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：高分子材料の特徴【天然高分子と合成高分子】</p> <p>第2回：高分子の構造【一次構造、高次構造】</p> <p>第3回：高分子の熱的性質【エンタルピー、エントロピー】</p> <p>第4回：高分子の力学的性質【粘弾性】</p> <p>第5回：天然高分子Ⅰ【セルロース】</p> <p>第6回：天然高分子Ⅱ【アミノ酸とタンパク質】</p> <p>第7回：合成高分子Ⅰ【重合プロセス】</p> <p>第8回：合成高分子Ⅱ【反応機構】</p> <p>第9回：紡糸【湿式・乾式紡糸、熔融紡糸、液晶紡糸】</p> <p>第10回：機能性高分子・セルロースナノファイバー【調製・改質法と特性】</p> <p>第11回：繊維製品の物理量測定法Ⅰ【機械的性質】</p> <p>第12回：繊維製品の物理量測定法Ⅱ【機能的特性】</p> <p>第13回：繊維製品の物理量測定法Ⅱ【視覚に関する物理量】</p> <p>第14回：まとめと解説</p>			
<p>授業外学修：予習1時間、復習1時間</p> <p>授業前にテキストの次回範囲を読み、要点をまとめておくこと（予習100分）。</p> <p>「有機化学」「繊維学」「被服材料学」の復習（100分）。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>「高分子材料の化学」（丸善）、「最新テキスタイル工学」（繊維社）</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>必要に応じて、その都度指示する。</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>予習復習を含めた授業時の回答等の平常点30点。課題に対するレポート提出30点。試験40点。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：食品材料評価学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：峯木真知子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>食品学・調理科学的研究を行う上で必要なレオロジーの評価や構造よりみた評価に関する高度な知識を習得するリサーチワークの分野として、食品評価の方法を学ぶ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 安心・安全で、おいしく、健康の維持増進に役立つ食品素材の調理加工を目指して、組織構造的評価や官能評価により究明すべき課題を探索できる能力を養う。 2) 食品素材と調理加工品としての評価方法を知る。 3) 過去の文献を検索し、開発および応用研究の実験計画を立てる。 4) 専門的領域における知識を深め、高度専門職業人としてこれらを応用して自立した活動や研究ができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>興味のある食品素材について、調理特性を予備実験より調べ、その栄養効率、加工特性を考え、その評価法を学修する。また、それらの食品素材をどのように研究していくのかのテクニックも検討する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：オリエンテーション</p> <p>第2回：食品材料のおいしさ (1) 物理的特性</p> <p>第3回：食品材料のおいしさ (2) 化学的特性</p> <p>第4回：食品の官能評価とその方法(1) 視覚、嗅覚</p> <p>第5回：食品の官能評価とその方法(2) 味覚</p> <p>第6回：食品の構造観察とその方法 (1) 光学顕微鏡のテクニックと応用</p> <p>第7回：食品の構造観察とその方法 (2) 走査型電子顕微鏡のテクニックと応用</p> <p>第8回：食品のテクスチャーとその方法 (1) 咀嚼・嚥下機能低下食品</p> <p>第9回：食品のテクスチャーとその方法(2)</p> <p>第10回：食品・調理・加工の問題点と開発</p> <p>第11回：各自の研究に関連した論文内容の輪読、発表、質疑応答 (和文)</p> <p>第12回：各自の研究に関連した論文内容の輪読、発表、質疑応答 (英文)</p> <p>第13回：各自の研究に関連した論文内容の輪読、発表、質疑応答 (英文)</p> <p>第14回：総括、レポート提出</p>			
<p>授業外学修：予習100分、復習100分は授業前に必要である。</p> <p>文献を読み、理解し、それをまとめるようにする。常に文献検索を怠らず、論文を読む。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>食の官能評価入門 光生館</p> <p>テーマに沿った論文および著書の紹介、食品・調理・加工の組織学 学窓社</p> <p style="text-align: center;">食卵の科学とその機能 アイケイコーポレーション</p>			
<p>参考書・参考資料等：随時紹介する</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常点</p>			

(30%)、自主的な学習態度 (20%)、課題およびレポート提出 (50%) などで総合的に評価する。

その他：プレゼンテーションも行うので、自分で調べ、発表する力を養う。

授業科目名： 食品材料利用学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：小林理恵
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 受講者自らが特定の食品を選定し、調理科学分野における研究動向および利用状況を調べて問題を抽出することができる。 2. リサーチクエストンを整理した上で、この問題解決をする意義と重要性を説明できる。 3. 設定したリサーチクエストンに対する妥当な研究手法がデザインできる。 			
<p>授業の概要</p> <p>食物の嗜好性を高め健康増進に寄与するだけでなく、社会貢献へと結び付けられるように食品材料を有効利用するためには、自然科学的アプローチに加えて、人文科学および社会科学的な理解が必要である。本講座では社会および経済的背景、歴史的背景、国内外における利用の現状など、さまざまな観点から研究動向と利用状況を調べ、テーマに関わる課題を抽出した上で、さらなる有効利用法を見出す意義と重要性を考える機会としたい。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：テーマ食品に関連する文献収集（国会図書館の利用法を含む）および臨地調査 第2回：基礎的な情報の収集（テーマ食品の食品学的位置づけ） 第3回：国内外における歴史的背景（食としての利用の起源および国内への伝播など） 第4回：近年における生産と流通の実態 第5回：国内における調理・加工利用の現状と食習慣 第6回：国外における調理・加工利用の現状と食習慣 第7回：一次特性に関する過去の研究と解明されている事項の確認 第8回：二次特性に関する過去の研究と解明されている事項の確認 第9回：三次特性に関する過去の研究と解明されている事項の確認 第10回：利用向上に向けて有意義と考えられる解決すべき問題点の抽出 第11回：問題解決のための研究方法と期待される結果（仮説の設定） 第12回：プレゼンテーションおよび討議の実施 第13回：討議結果を踏まえた課題解決法の整理 第14回：最終プレゼンテーションおよび討議によりテーマ食品の有効利用研究の展望をまとめる</p>			
<p>授業外学習：講座の前に、関連論文の収集、臨地調査を行う（予習100分）。プレゼンテーション時には、パワーポイントで資料を作成し、発表練習をしておくこと（復習100分）。</p>			
<p>テキスト：特に指定しない。</p>			
<p>参考書・参考資料等：評価の高い学術雑誌（主に国際誌）および成書を紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。 自主的な学習態度と授業への意欲、毎回の授業におけるプレゼンテーションと質疑応答の内容により総合的に評価する。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 機能性食品素材開発学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：佐藤吉朗
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>飽食の時代にあつて、食品に対する日本人の欲求はおいしさに留まらず食品の機能特にその食品を食することによって我々がどのような健康に対する恩恵を受けるかという点に興味を持たれている。実際に機能性食品を開発するに当たって、どのような点に力点を置くべきなのかを理解できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>講義、文献調査及び討論という形で機能性食品について開発の道筋を習得してゆく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：機能性食品とは概説</p> <p>第2回：機能性食品の種類について</p> <p>第3回：特定保健用食品の種類</p> <p>第4回：特定保健用食品の開発状況</p> <p>第5回：特定保健用食品と所謂健康食品との違い</p> <p>第6回：市場調査（若者用）</p> <p>第7回：市場調査（中年者向け）</p> <p>第8回：市場調査（高齢者向け）</p> <p>第9回：市場調査（介護者向け）</p> <p>第10回：討論（若者向け食品について）</p> <p>第11回：討論（中年者向け食品について）</p> <p>第12回：討論（高齢者向け食品について）</p> <p>第13回：討論（介護者向け食品について）</p> <p>第14回：討論（健康食品の意義）及び総括</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>次回の授業内容に対する調査。予習100分、復習100分。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>プリント等、随時</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>随時</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>授業に対する取り組み姿勢：平常点40点、レポート作成40点、諮問に対する受け答え20点。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：分子生物学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：大西淳之
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院生は、下記の項目について理解し課題点を整理できる。1) 細胞表面に届いたシグナル（ホルモン、増殖因子、栄養因子など）がどのような機序で細胞膜で隔てられた内部に情報として伝達され、その情報がどのように発揮されるのかについて最新の知見の整理、2) 栄養シグナルとしての糖、脂質、アミノ酸による転写調節機序、3) 心身の機能調整に関わるシグナル情報伝達系。授業期間では関連教科書の輪読を行い基礎的な理解を深めることができる。後半では関連する英語論文をセミナー形式で発表しながら最新の知見について学習する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>心身の健康と食との関連について、代謝生化学や栄養シグナル伝達の視点から解説する。この特論では細胞間や細胞内での情報伝達の基本原理と、外界からの刺激による細胞の応答に関する分子機構を理解する。特に、細胞質と核内との間で行われる物質輸送の調節機序については、栄養素の関わりに着目して最新の知見をもとに解説する。加えて、核内イベントのうち栄養条件に応じたクロマチンの構造変化と、それに伴う遺伝子発現制御についても解説する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： シグナル伝達の概要：</p> <p>第2回： チロシンキナーゼ：受容体型および非受容体型キナーゼによるシグナル伝達機序</p> <p>第3回： セリン・スレオニンキナーゼによるシグナル伝達機序</p> <p>第4回： GTP結合タンパク質：3量体およびSmall Gタンパク質を介したシグナル伝達機序</p> <p>第5回： 情報物質としてのイノシトールリン脂質の構造と代謝</p> <p>第6回： 転写装置とプロモーター</p> <p>第7回： 転写制御</p> <p>第8回： イオンチャンネルの制御、受容体型イオンチャンネルの制御</p> <p>第9回： ユビキチン・プロテアソーム依存的タンパク質分解システム</p> <p>第10回： 栄養シグナルによる転写調節</p> <p>第11回： 栄養シグナル伝達に関連する最新の論文紹介</p> <p>第12回： 精神疾患と代謝生化学に関する最新知見</p> <p>第13回： 精神疾患と代謝生化学に関する最新の論文紹介</p> <p>第14回： 総合討議</p>			
<p>授業外学修：受講者には下記のテキストから各テーマに関連する章の解説を担当してもらう。担当する章を読解した上で不明な点を明らかにする（所要時間240～420分）。発表1週間前に解説用の配布資料を作成すること（所要時間120～360分）。</p>			
<p>テキスト：『実験医学増刊 遺伝子制御の新たな主役 栄養シグナル～糖、脂質、アミノ酸による転写調節・生体向上（羊土社）』、『実験医学増刊 脂質クオリティ～生命機能と健康を支える脂質の多様性（羊土社）』、『シグナル伝達がわかる（羊土社）』、『遺伝子発現のオンとオフ（メディカル・サイエンス・インターナショナル）』</p>			
<p>参考書・参考資料等：関連する『実験医学（羊土社）』および『実験医学増刊（羊土社）』</p>			

学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常点20点、理解力（読解力を含む）40点、プレゼンテーション力40点

その他：開講日は受講者と打ち合わせて特定の曜日にするか集中形式にするか決める。

授業科目名：生体材料学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：池田壽文
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>①生体材料とは何かを概説できる。</p> <p>②生体材料として利用される高分子化合物の分類・特性を説明できる。</p> <p>③生体材料を利用して応用可能な機能性高分子のデザインを試みることができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>「生体材料」とは一般に医療分野で使用される言葉で、生体適合性を示す材料および物質のことである。例えば、人工関節や人工心臓弁など本来の機能を失った臓器・器官の代わりに生体内に移植される材料などがそれである。しかし、医療分野のみならず、工学・化学・生物学といった様々な分野との融合によって、新たな機能性材料を生み出している現状もある。</p> <p>本講義では生体機能に関連した高分子素材に焦点を当て、実際にどのような形で生活の中で活用されているのかを中心に解説する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス</p> <p>第2回：生体を構成する天然高分子1：核酸</p> <p>第3回：生体を構成する高分子2：アミノ酸・タンパク質</p> <p>第4回：生体を構成する高分子3：糖質と脂質</p> <p>第5回：生体材料に資する合成高分子1：分類</p> <p>第6回：生体材料に資する合成高分子2：特性</p> <p>第7回：分子認識能力を有する高分子材料：分類</p> <p>第8回：分子認識能力を有する高分子材料：特性</p> <p>第9回：生体適合性を有する高分子材料：分類</p> <p>第10回：生体適合性を有する高分子材料：特性</p> <p>第11回：高分子材料の医薬への応用：抗体医薬品</p> <p>第12回：高分子材料の医薬への応用：核酸医薬品</p> <p>第13回：高分子材料の医薬への応用：DDS</p> <p>第14回：全体のまとめ</p>			
<p>授業外学修：小課題は各授業前に指示するので予習（100分程度）を行い授業内容の理解に努めること。また、小課題の内容を中心に授業を進めていくので、理解が不足している事項に関しては、授業時間中に質問できるようにまとめておくこと。</p> <p>さらに、授業で理解した内容に関して概要をまとめること（100分程度）。</p>			
<p>テキスト：必要に応じて、その都度配布と紹介。</p>			
<p>参考書・参考資料等：有機化学の知識は修得していることを前提として授業を実施する。例えば、マクマリー 生物有機化学「基礎化学編」の内容は理解していることが望ましい。</p> <p>必要に応じて、追加資料を配布し、或いは、参考書を紹介する。</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p>			

評価は「小課題50%、レポート50%」で行う。第10回目の授業終了後にテーマを発表するので、第14回目の授業終了時に提出する。

その他：

初回のガイダンスの授業に必ず出席する。そこで、本講義の目的、方法、成績評価法などの重要事項を説明する。

授業科目名：酵素学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：小西康子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生化学は生命を分子レベルで取り扱う学問であり、その中でも生化学反応を担う酵素に関する学問は、栄養学だけでなく生命を対象とする学問を理解するための基礎をなしている。本科目では、新しい現象や問題にであったときにそれを理解し解決できるような能力を養うことを目的に、酵素学の基礎知識を習得する。</p> <p>[到達目標]・酵素の構造について分類し、機能性と関連づけて説明することができる</p> <p>・酵素の利用開発例を列挙し、その実際について説明することができる</p>			
<p>授業の概要</p> <p>ヒトの健康と食に関係する酵素について、その遺伝子、立体構造、生理機能、反応速度論的性質、さらに利用開発をも含む幅広い観点からの知識を習得し、生体触媒としての酵素を深く理解することで、食生活の課題を解決する能力を養う。ヒトから微生物に至る種々の酵素を対象として、講義と文献紹介、討論を組み合わせた授業展開を行う。セミナー形式の発表および質疑応答を通じて、理解力とプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を養う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： 酵素の分類</p> <p>第2回： 化学反応速度論</p> <p>第3回： 酵素反応速度論</p> <p>第4回： 前定常状態での速度論</p> <p>第5回： 阻害の反応機構</p> <p>第6回： アロステリック酵素の反応機構</p> <p>第7回： 反応特異性と基質特異性</p> <p>第8回： 酵素の構造</p> <p>第9回： 酵素の遺伝子</p> <p>第10回： 酵素の改変技術</p> <p>第11回： 酵素を用いた分析方法</p> <p>第12回： 酵素を用いた食品の開発</p> <p>第13回： 酵素を用いた医薬品の開発</p> <p>第14回： まとめと解説</p>			
<p>授業外学修：教科書の予習（100分）と発表準備（100分）</p>			
<p>テキスト：ホートン生化学 第5版（東京化学同人）</p>			
<p>参考書・参考資料等： 特になし</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>平常30点、理解度（質問力）40点、プレゼンテーション力30点</p>			
<p>その他：</p> <p>予習・発表準備などを必ず行ってから毎回の講義に臨むこと。</p>			

授業科目名：食品材料工学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：鍋谷浩志
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>農畜水産物などの生物資源を加工して食品または食品素材を生産し、それらを調理して経口摂取したときに身体に及ぼす影響までを取り扱い、人類の健康で豊かな生活に貢献する食品科学を工学的側面から支える食品材料工学について基礎的な知識を習得する。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>家庭での食生活および食品産業における食品生産の基本的素材である小麦粉、飲み物、マヨネーズとマーガリンを食品加工における材料の例として取り上げ、これらを工学的に取り扱う際の基礎的な知識を習得する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：食品・食材を作る際の基礎的な操作</p> <p>第2回：小麦粉とその製品（小麦粉の分類と用途）</p> <p>第3回：小麦粉とその製品（小麦粉の粗さ）</p> <p>第4回：小麦粉とその製品（パンの食感）</p> <p>第5回：小麦粉とその製品（スパゲッティ）</p> <p>第6回：小麦粉とその製品（パン酵母を培う）</p> <p>第7回：飲み物（牛乳；殺菌）</p> <p>第8回：飲み物（インスタントコーヒー；抽出）</p> <p>第9回：飲み物（インスタントコーヒー；濃縮）</p> <p>第10回：飲み物（インスタントコーヒー；噴霧乾燥と凍結乾燥）</p> <p>第11回：飲み物（焼酎；単蒸留と連続蒸留）</p> <p>第12回：マヨネーズとマーガリン（エマルジョン）</p> <p>第13回：マヨネーズとマーガリン（界面活性剤（乳化剤））</p> <p>第14回：マヨネーズとマーガリン（レオロジー）</p>			
<p>授業外学修：予習0.5時間、復習・ノート整理0.5時間</p> <p>学部で学習した「食品加工学」の中の、保蔵の保蔵、安全性確保、農産加工について復習しておく。</p>			
<p>テキスト：</p> <p>食品を作る基礎科学「食品工学入門」（安達修二、古田武）カルチュレード</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>「基礎食品工学」（林弘道、堀内孝、和仁皓明）建帛社</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>平常点20%、小課題30%、レポート提出50%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 食品材料プロセス特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：赤石記子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>食品の調理・加工による物性、栄養成分および機能性などの変化について理解できる。 持続可能な食生活を送るための調理・加工のプロセスについて理解できる。 得られた知識を基に解決すべき課題を議論しながら考察を深めることができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本授業では、食品の調理・加工による物性（テクスチャーなど）、栄養成分および機能性などの変化について理解を深めるとともに、持続可能な食生活を送るための調理・加工のプロセスについて考える。そのために、授業では食品材料からのアプローチと調理・加工のプロセスからのアプローチを行う。調理加工の主要操作の一つである加熱処理の基礎的理論や仕組みと食品に与える様々な影響を講義し、調理面から人々の健康と社会の発展に貢献できるような専門的能力を養う。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：はじめに、本講義の概要と目的とするもの 第2回：調理・加工における加熱操作の仕組み 第3回：調理加工による変化～穀類製品（小麦）～ 第4回：調理加工による変化～穀類製品（大豆）～ 第5回：調理加工による変化～果実類～ 第6回：調理加工による変化～動物性食品～ 第7回：食と環境の関わり～生産～ 第8回：食と環境の関わり～消費～ 第9回：各自の研究に関連した論文内容の精読 第10回：各自の研究に関連した論文内容の発表 第11回：企業の調理・加工における持続可能な取り組みの実際～市場調査～ 第12回：企業の調理・加工における持続可能な取り組みの実際～見学～ 第13回：企業の調理・加工における持続可能な取り組みの実際～報告～ 第14回：まとめ</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>授業前：関連分野（調理学、食品学等）について、復習しておく。（1時間） 授業後：与えられた課題とレポートに取り組む。（1時間）</p>			
テキスト：印刷物を配布			
参考書・参考資料等：随時指示する			
学生に対する評価：平常点（40%）、小課題（30%）、最終レポート（30%）で総合的に評価する			
その他：			

授業科目名： 機能的食品学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：重村 泰毅
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>大学院生が、食品中の機能的成分の作用機構を明らかにできることを目標とする。</p> <p>修士課程とは異なり、自身の担当する研究を自ら得た成果から国際的に公表できるようにする。</p> <p>そのためには、完成させる論文や国際学会発表に必要な成果、また必要な研究方法などを把握できるようにする。それによって、開始前から進める機能的食品研究を想定できるようにする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>機能的食品は、消費者向けの市場が存在するからこそ価値がある。まず、その商品化や消費者に向けて何を訴求する必要があるかを理解していく。並行して、現状訴求できる文言についても理解する。</p> <p>さらに現在の機能的食品のトレンドや、今後のニーズとシーズも予測できるような視野を現在の研究情勢を論文等から読み解いていく。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回： 機能的食品のポジションについて</p> <p>第2回： 流通する機能的食品の過去と現在</p> <p>第3回： 機能的食品の許可と商品化</p> <p>第4回： 現在の機能的食品 データ収集</p> <p>第5回： 現在の機能的食品 データからの考察</p> <p>第6回： 今後の機能的食品 データ収集</p> <p>第7回： 今後の機能的食品 論文から</p> <p>第8回： 機能的食品を生み出す システマティックレビュー</p> <p>第9回： 機能的食品の研究</p> <p>第10回： 機能的食品の評価 方法</p> <p>第11回： 機能的食品の開発① 戦略</p> <p>第12回： 機能的食品の開発② 論文化</p> <p>第13回： 機能的食品を公表① プレゼンテーション</p> <p>第14回： 機能的食品を公表② 論文作成</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>市場の機能的食品を調査しておく。食品の種類、含まれる成分、記載表示について。 30分</p>			
<p>テキスト：</p> <p>なし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>消費者庁ホームページ</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>出席20% レポート課題30% プレゼンテーション50%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：被服管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：森 俊夫
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>各種繊維製品の多様化により、個々の製品に対する取り扱いも複雑化・高度化している。化学物質などによる環境汚染や事故事例を紹介し、問題点を洗い出し、正しい取扱い方法を理解することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>近年、多くの機能性繊維、エコフレンドリー繊維が開発され、素材の多様化、複合化が進んでいる。これら繊維製品の購入時の状態を長く保持するには、素材の特性を知り、正しい取扱いを行う必要がある。そこで、取り扱い中に事故につながりやすい洗濯、ドライクリーニングを中心に、事故事例を紹介し、化学物質を含む繊維製品の正しい取扱い方法を理解する。日本のみならず、海外ではどのような取扱いをしているか、また、クリーニングに関する最近の文献も紹介する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：化学物質の危険性と環境汚染</p> <p>第2回：クリーニングについて</p> <p>第3回：取り扱い絵表示について</p> <p>第4回：ドライクリーニング溶剤の動向</p> <p>第5回：ヨーロッパでのクリーニングの動向</p> <p>第6回：アメリカでのクリーニングの動向</p> <p>第7回：機能性素材等のドライクリーニングにおける問題点</p> <p>第8回：染色製品のドライクリーニングにおける問題点</p> <p>第9回：機能性繊維の取り扱い方における問題点</p> <p>第10回：機能性繊維の正しい取り扱い方</p> <p>第11回：エコフレンドリー繊維製品の取り扱い方における問題点</p> <p>第12回：エコフレンドリー繊維製品の正しい取り扱い方</p> <p>第13回：洗濯に関する最近の文献の講読</p> <p>第14回：まとめ</p>			
授業外学修：予習100分、復習・ノート整理100分			
テキスト：プリントを配布する。			
参考書・参考資料等：必要に応じて授業内で紹介する。			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。予習・復習の有無20点。諮問に対する受け答え、出席などの平常点40点。課題に対するレポート提出40点。</p>			
<p>その他：課題やレポートについては自らのフィードバックプロパゲーションにより、思考を深める内容を必要とする。</p>			

授業科目名： 臨床栄養管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：澤田めぐみ
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>わが国のCOPDは欧米に比べ栄養障害の頻度が高く、体重減少は気流閉塞とは独立した予後因子であるとされている。こうしたことから臨床的に重要な意義を持つと考えられるCOPDの栄養管理について、病期別の特徴をとらえて理解することができる。特に酸素療法・補助換気療法を受ける中等症以上の症例を中心に理解を深め、栄養管理の更なる発展に必要な課題を見出し解決していくことができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>COPDの栄養療法に関する諸研究についての考察を通じ、人間生活学専攻の学位授与方針に基づき、COPDの予後改善に寄与する栄養管理について新しい課題を発見し、それを自らの研究成果によって証明することのできる能力を養う。またCOPDの呼吸リハビリテーションにおいては栄養士・医師・看護師・理学療法士などによるチーム医療が不可欠なことから、栄養学のみにとどまらない学際的視野を持って研究成果をまとめる能力を育む。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：酸素療法の実際</p> <p>第2回：在宅酸素療法の実際</p> <p>第3回：補助換気領邦の実際</p> <p>第4回：在宅人工呼吸療法の実際</p> <p>第5回：COPD重症例の栄養療法</p> <p>第6回：COPD重症例の栄養評価</p> <p>第7回：急性増悪の対応</p> <p>第8回：喘息合併COPDの管理</p> <p>第9回：全身併存症と肺合併症の対応</p> <p>第10回：COPDの薬物管理</p> <p>第11回：COPDの運動療法</p> <p>第12回：在宅管理の実際</p> <p>第13回：終末期COPDへの対応</p> <p>第14回：全人的対応のあり方</p>			
<p>授業外学修：毎回次回の予習内容を指示する（予習時間100分）。講義終了後は復習を100分程度行う事。</p>			
<p>テキスト：参考とする論文をその都度指示する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>COPD（慢性閉塞性肺疾患）診断と治療のためのガイドライン第4版 メディカルレビュー社</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>平常点80%（口頭試問・小テストなどを含む）・課題に対するレポート提出20%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 代謝栄養管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：尾形真規子
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>糖尿病・骨粗鬆症などの代謝疾患の病態について合併症も含め、基礎的なことから発症の理解ができる。最先端の知識を得るための方法が理解でき、疑問点を明らかにする方法を模索できる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>糖尿病・骨粗鬆症の病態について、細胞生理学から理解していく。ある程度の知識を得たところで、基本的に英語論文による抄読会方式を取る。</p> <p>毎回興味のある事例・論文に付き調べ、発表し、その内容についてお互いに検討していく。質問に回答できなかった場合は次の回までに調べ、発表し、さらに議論をしていく。</p> <p>最終的に自分の興味を持った事柄に関するレビューをまとめ、レポートとして提出する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：細胞の構造・</p> <p>第2回：インスリン分泌、骨代謝</p> <p>第3回：糖尿病の病態</p> <p>第4回：糖尿病の合併症①</p> <p>第5回：糖尿病の合併症②</p> <p>第6回：糖尿病の合併症③</p> <p>第7回：骨粗鬆症の病態</p> <p>第8回：その他の代謝疾患の病態</p> <p>第9回：興味のある論文の内容発表①</p> <p>第10回：興味のある論文の内容発表②</p> <p>第11回：興味のある論文の内容発表③</p> <p>第12回：興味のある論文の内容発表④</p> <p>第13回：作製したレポート発表</p> <p>第14回：発表に対しての質問に対する説明発表、考察に沿ったさらなる論文の紹介</p>			
<p>授業外学修：</p>			
<p>テキスト：Standards of Diabetes Care 2020 (American Diabetes Association)、日本糖尿病学会編 糖尿病の治療2020-2021、Essential Cell Metabolism など</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>英語論文</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>講義中議論参加30%、レポート70%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：健康管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：岡 純
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>生活習慣病の一次予防には、栄養や運動などの生活習慣の是正による肥満の防止が大切であるが、授業では、肥満と肥満症、肥満の健康に及ぼす影響、糖尿病、脂質異常症、高血圧、動脈硬化症などの予防と治療について学習し、知識を習得することができることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>現在の日本の直面する健康問題の一つに、肥満・糖尿病、脂質異常症、高血圧など非感染性慢性疾患の蔓延とそれらによるQOLの低下がある。これら生活習慣病は、栄養や運動などの生活習慣の是正が大切な一次予防と考えられ、多くの研究が行われている。</p> <p>この授業では、栄養や運動などの生活習慣の是正に関する知識の学習を目的とし、英語文献などを検索してそれらを紹介しながら内容を精読し、詳しく考察する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：肥満・糖尿病について（1）肥満の判定、肥満の疫学</p> <p>第2回：肥満・糖尿病について（2）肥満症という疾患概念</p> <p>第3回：肥満・糖尿病について（3）糖尿病の病因と病態生理および治療、予後</p> <p>第4回：脂質異常症について（1）脂質異常症の概念と病態生理</p> <p>第5回：脂質異常症について（2）脂質異常症の臨床所見、検査所見</p> <p>第6回：脂質異常症について（3）脂質異常症の診断、治療、予後</p> <p>第7回：高血圧（1）本態性高血圧の定義</p> <p>第8回：高血圧（2）高血圧の病態生理と臨床所見、診断</p> <p>第9回：高血圧（3）高血圧の治療、予後</p> <p>第10回：動脈硬化症（1）肥満と動脈硬化症</p> <p>第11回：動脈硬化症（2）糖尿病と動脈硬化症</p> <p>第12回：動脈硬化症（3）脂質異常症と動脈硬化症</p> <p>第13回：動脈硬化症（4）高血圧と動脈硬化症</p> <p>第14回：動脈硬化症（5）動脈硬化症の治療、予後</p>			
<p>授業外学修：授業前には資料を全文和訳してくる。予習100分、復習100分</p>			
<p>テキスト：特になし。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>適宜英語文献を使用する。</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>平常点（20%）、面接による期末試験（60%）レポート（20%）</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名：食品管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：宮尾茂雄
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>食品の品質保持および安全性確保に関する専門的知識を修得するとともに食品の品質保持に関連する研究や食品の流通管理を行う上で必要な高度な知識を応用することができる。修得した専門的知識を基に対象となる食品の品質保持、安全性確保を操作することができる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>食品の安全性確保、品質保持を図るための知識の習得、様々な食品の特性に対応した食品管理の在り方について、食品製造工程における危害分析、重要管理点、モニタリングに関する専門的知識を修得する。また、食品の安全性確保において重要な位置を占める微生物の生態および制御方法に関する高度な専門的知識について深く理解し、能力を高める。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：食品の安全性確保、HACCPについて</p> <p>第2回：食品製造工程における食品危害分析（生物的危害）</p> <p>第3回：食品製造工程における食品危害分析（化学的危害、物理的危害）、異物混入</p> <p>第4回：食品製造工程における重要管理点とモニタリング</p> <p>第5回：微生物の生態と環境条件</p> <p>第6回：微生物の汚染とその対策</p> <p>第7回：静菌の概念と意義</p> <p>第8回：温度、脱酸素剤による微生物制御、品質保持</p> <p>第9回：pHの調節と浸透圧・水分活性の利用</p> <p>第10回：化学的保存技術の概念と意義</p> <p>第11回：天然物由来物質による食品保存</p> <p>第12回：洗浄およびろ過の概念と意義</p> <p>第13回：物理的殺菌と化学的殺菌</p> <p>第14回：総括</p>			
<p>授業外学修：予習100分、復習・ノート整理100分</p> <p>保存食品開発物語（スー・シェパード、赤根洋子訳）を事前に読んでおく。</p>			
<p>テキスト：授業ごとに資料を作成、配布し、それに基づいて授業を行う。</p>			
<p>参考書・参考資料等：「食品微生物学ハンドブック」、「食品製造の微生物管理マニュアル」</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。平常点20%、小課題30%、レポート提出50%</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 生活情報処理特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：松木孝幸
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>統計の概念を理解し、実データを与えられたときにどのソフトを使用しても統計処理ができること。データをデータベースに格納していつでも利用できるようになること。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間生活学の研究を遂行してゆくために必要となる情報あるいはデータの取り扱い方、得られたデータに対する統計学の利用（統計処理）あるいは方法論について述べる。具体的には、データをデータベースに格納する方法と利用方法、多変量解析における重回帰分析のやり方を学び、多くの変数に依存したデータの解析方法を学ぶ。さらにパソコン上ではExcel、SPSSなどを利用してこれらの方法論がどのように実現されるかを学び、具体例を用いて生活情報処理に必要な知識を習得する。</p>			
<p>授業計画 クラウドの利用が身につくような授業形態にする。</p> <p>第1回：データの分析と可視可（確率による円周率の導出）</p> <p>第2回：データの分析と可視可（サイコロの目の偶奇性と確率）</p> <p>第3回：代数ソフトによる可視可（Maximaによる数値計算）</p> <p>第4回：代数ソフトによる可視可（Maximaによる代数計算と描画方法）</p> <p>第5回：Excelによるデータの統計処理（ポアソン分布）</p> <p>第6回：Excelによるデータの統計処理（正規分布）</p> <p>第7回：Excelによるデータの統計処理（検定の考え）</p> <p>第8回：SPSSによるデータの統計処理（データの作成と保存）</p> <p>第9回：SPSSによるデータの統計処理（基礎統計量）</p> <p>第10回：SPSSによるデータの統計処理（クロス集計と検定）</p> <p>第11回：SPSSによるデータの統計処理（回帰分析）</p> <p>第12回：データベース実習（SQL文によるデータの抽出）</p> <p>第13回：データベース実習（PHPによるホームページの記述）</p> <p>第14回：データベース実習（SQLとPHPとHTMLの関係）</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>基本的な用語、操作については承知しておくこと。予習100分、復習100分</p>			
<p>テキスト：</p> <p>適宜指示する。</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>SPSSによるやさしいアンケート分析</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>授業態度(30%)、レポート(40%)、討議(30%)</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： 病態代謝管理学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：勝川史憲
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>少子化の進展により、今後わが国では生産年齢人口の減少が深刻となる。この授業の目的は、生産年齢期の健康の維持・増進対策、とくに生活習慣病の対応に関連する多角的な視点を得ることにある。具体的には、生活習慣病の疫学・病態生理学、食事・運動療法の歴史的背景と有効性のエビデンス、政策の状況、保健事業の立案・効果分析の手法について把握し、生活習慣病対策の多面的な理解を深めることを目指す。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>前半はスライドを用いて講義を行ない、後半はディスカッションにより理解を深めるとともに、現状の課題を明確化する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：イントロダクション：わが国の職域生活習慣病対策 (特定健診・保健指導、データヘルス計画)</p> <p>第2回：肥満：体組成とエネルギー出納</p> <p>第3回：肥満と合併症の関連：疫学と病態生理学</p> <p>第4回：生活習慣病のエネルギー処方の歴史的経緯</p> <p>第5回：糖質制限食の健康影響</p> <p>第6回：健康運動・身体活動のパラダイムの変遷</p> <p>第7回：運動処方と座位行動の健康影響</p> <p>第8回：高血圧と食事・運動の効果</p> <p>第9回：脂質異常症と食事・運動の効果</p> <p>第10回：食後高血糖・糖尿病と食事・運動の効果</p> <p>第11回：若年成人女性の「やせ」にいたる小児期の栄養</p> <p>第12回：職域の保健事業の立案と事例研究</p> <p>第13回：PDCAのための健診・レセプト突合データ分析</p> <p>第14回：高齢期に向けたフレイル予防</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>興味がある者は、健診・レセプトデータの分析に携わる事も可能である。また、職域の保健事業の立案、実施現場の見学も可能である。予習100分、復習100分</p>			
<p>テキスト：なし</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>配布資料の他、必要に応じ、論文等を指示する。</p>			
<p>学生に対する評価：「60点以上が可、70点以上が良、80点以上が優」で評価する。</p> <p>平常点(50%)及び小レポート(50%)の予定。</p>			
<p>その他：</p>			

授業科目名： ロコモ・フレイル特論	単位数：2単位	選択	担当教員名： 清水順市
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ロコモティブシンドロームについて説明できる. 2. サルコペニアについて説明できる. 3. フレイルについて説明できる. 4. 国・自治体・企業の取り組みを理解できる. 			
<p>授業の概要</p> <p>人は加齢に伴い身体的、精神的および社会的な影響を受ける。その因子として、疾病や環境（感染症を含めて）、社会的役割や食生活の変化が挙げられる。本授業では、身体的および精神的に表出する特徴的現象、症状について解説するとともに、国及び自治体の予防策のあり方について考える。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：加齢とは</p> <p>第2回：加齢に伴う身体的な変化</p> <p>第3回：加齢に伴う運動器疾患と運動能力の変化</p> <p>第4回：加齢に伴う社会的役割の変化</p> <p>第5回：加齢に伴う食および食習慣の変化</p> <p>第6回：ロコモティブシンドロームとは</p> <p>第7回：サルコペニアとは</p> <p>第8回：フレイルとは</p> <p>第9回：コロナフレイルの特徴</p> <p>第10回：栄養とサプリメントそしてエネルギー消費</p> <p>第11回：国の対策</p> <p>第12回：国外の対策</p> <p>第13回：自治体の取り組み</p> <p>第14回：企業の取り組み</p>			
<p>授業外学修：</p> <p>配布資料の予習と復習（60分）</p>			
<p>テキスト：</p> <p>資料配布</p>			
<p>参考書・参考資料等：</p>			
<p>学生に対する評価：</p> <p>レポート100%</p>			
<p>その他：</p> <p>なし</p>			

授業科目名： リハビリテーション科学特論	単位数：2単位	選択	担当教員名：鈴木誠
授業の到達目標及びテーマ			
<ol style="list-style-type: none"> 1. リハビリテーションに必要な計測方法について説明できる. 2. リハビリテーションに必要な解析方法について説明できる. 			
授業の概要			
<p>リハビリテーションは、神経生理学、心理学、生体力学、情報学などの多岐に亘る学問領域を基盤として成立している。そのため、リハビリテーションを効果的に実施するためには、多角的な観点から人の活動に関する法則を科学的に探究する必要がある。本授業では、人の活動を多角的に計測および解析するための方法について考える。</p>			
授業計画			
第1回：リハビリテーションに必要な基礎的学問			
第2回：脳波計による脳活動計測			
第3回：筋電図計による筋活動計測			
第4回：モーションキャプチャによる動作計測			
第5回：最小二乗法によるモデル近似			
第6回：ベイズ定理による状態推定			
第7回：フーリエ変換による周期データの推定			
第8回：自己回帰モデルによる時系列データの推定			
第9回：順序ロジスティック解析による順序データの推定			
第10回：三次元解析による動作推定			
第11回：機械学習によるパターン識別			
第12回：強化学習による行動推定			
第13回：シングルケース研究デザイン			
第14回：グループ研究デザイン			
授業外学修：			
配布資料の予習と復習（60分）			
テキスト：			
資料配布			
参考書・参考資料等：			
資料配布			
学生に対する評価：			
レポート100%			
その他：			
なし			

授業科目名：研究指導 特別研究	単位数：	必修	担当教員名：25名
<p>授業の概要</p> <p>高度の専門性を求められる本専攻においては、人間生活科学に関わる最新の研究成果に基づいた研究の実践、指導を行い、得られた成果のとりまとめと論文指導を行う。</p> <p>(澤田めぐみ)</p> <p>COPD の全身性併存症である心血管病変について、血管内皮機能などの面から評価を行いその進行を予防する栄養学的アプローチについて研究指導を行う。また、肺高血圧に関連し予後の悪化を引き起こす肺血管床の組織学的再構築につながる炎症性要因について研究を行う。</p> <p>(藤森文啓)</p> <p>生命活動においては、人口問題・環境問題など多岐にわたる問題が常に関与する。人類が構築してきた様々なデータベースの中でもゲノムデータ（遺伝子・生化学など）を活用し上述の問題を解決する手法論について学ぶ。</p> <p>(池田壽文)</p> <p>生体機能に使用されている素材、或いは、細胞や臓器・器官などの仕組みを理解したうえで、それに対して生体適合性を持たせた機能性分子を設計する技術を身に付ける。これを実現するうえで必須となる各種分析方法を身に付ける。以上の一連のスキルを駆使し、生命科学分野における研究課題を克服し、その成果を論文化するための指導を行う。</p> <p>(井上俊哉)</p> <p>各自の関心に合致する心理学研究を数多く読み込むことから始める。そして、先行する研究で明らかになっていること、未解決な問題を整理した上で、オリジナルな研究を構想する。</p> <p>(岩崎美智子)</p> <p>おもに、社会的養護などの児童家庭福祉や、保育者による親子支援に関する研究を、個人の語りに基づく質的調査によって行う。</p> <p>(潮田 ひとみ)</p> <p>衣服の着用快適感を決定する要因の解明、特に、環境－衣服－人間系での熱・水分移動特性と評価方法などに関する研究指導を行う。</p> <p>(榎沢良彦)</p> <p>保育における子どもと保育者の体験世界を探求することを通して、保育の質を向上させるための実践的な研究を行う。</p> <p>(大澤 力)</p>			

幼児期の自然教育・環境教育・持続可能性教育における科学性の芽生えから問題解決能力の育成に関する研究指導を保育・教育現場の実践研究も踏まえて行う。

(太田一樹)

各種疾病時におけるエネルギー代謝の変化について、基礎医学的研究を行うことで、病態生理を明らかにしていく。

(大西淳之)

月経随伴症状を女性にとっての周期的なストレスと捉え、症状の愁訴とストレス対処力としてのコピーレンス感覚 (Sense of coherence) との関係、および栄養生活状況を探る。

(尾形真規子)

生活習慣病、特に糖尿病、骨粗鬆症の病態について、臨床検討を行う。また臨床経験からの疑問を、細胞レベルで再現することで病態を明らかにしていく検討を行う。研究成果は学術論文としてまとめることを目標とする。

(小西康子)

酵素の機能解析を通じて、食生活の課題解決をめざした研究を実施する。また、酵素を用いた新規食品素材の開発へのアプローチを試みる。

(佐藤吉朗)

食品衛生において、しばしば問題にされる汚染物質を分析化学的に検査する方法を確立する。また、食品の品質において重要な成分の研究を GC/MS 法により実施する。

(清水順市)

ライフステージ後半に生じるロコモティブシンドローム、サルコペニア、フレイルなどの問題を量的 (生物学的側面) および質的 (社会的側面) から解析すると同時に、国や自治体の施策と統合した研究構想ができるために指導を行う。

(鈴木誠)

人の活動を、リハビリテーション学、行動分析学、神経生理学、生体力学、情報学の多角的視点から研究し、高度な研究能力を養う。

(高野貴子)

子どもの心と体の健全な発達を阻害する要因として、遺伝的側面と、胎内環境を含めた環境的側面を分析し、それらによって引き起こされる疾病や障害の研究を行う。

(戸田雅美)

保育行為の判断の根拠について検討することを中心とする研究を行う。具体的には、実践事例

を基にした研究や保育者を対象とする実践についてのインタビュー研究を行い、研究手法の確立にもつなげる。

(濱田仁美)

天然繊維材料を対象として、改質及び機能化を行うことで、新たな機能性を有するテキスタイル素材の開発を目的とした研究を行う。物性評価や構造解析などの物理化学的アプローチによる研究指導を行う。

(半澤嘉博)

共生社会づくりを目指した特別支援教育やインクルーシブ教育に関して、障害特性に応じた実践的な教育内容、方法、評価等の研究を行う。

(平山祐一郎)

心理学的な調査・実験的手法によって、幼児期・児童期・青年期の学習活動または言語活動について、その発達の様相を記述する、あるいは教育的介入の効果を検討する研究指導を行う。

(福井至)

主に不安障害や気分障害、および適応障害などに関する、新たな認知行動モデルの構築とそのモデルに基づく治療プロトコル開発、およびその治療プロトコルの効果検証に関する研究指導を行う。

(三浦正江)

主に、心理的ストレスやメンタルヘルスに関するテーマについて、基礎研究やストレスマネジメント、SST、アサーショントレーニングなどの認知行動理論に基づく予防・介入研究を行う。

(宮島祐)

発達障害（神経発達症群）の子どもたちは一人ひとり異なる特性・才能を有しており、輝ける幼少期であるためにも「パステルゾーン」の概念を広く知らしめ、適切な環境とは何か、健やかに育むために、医療・教育・福祉など関係諸機関がどのように連携し対応していくべきか研究し、論文にまとめる。

(赤石記子)

調理科学的視点に基づいて、食品の調理・加工による物性（テクスチャーなど）、栄養成分、機能性および嗜好性変化について研究し、最終的には持続可能な食生活の構築につながるよう研究指導を行う。

(小林理恵)

一次加工を施した地域特産食品を利用した調理品を対象に、その栄養成分、外観、物性、健康機能性からも最適な調製条件を追究するとともに、新規研究手法の開発の可能性も検討しながら研究を遂行する。